



〔研修報告〕 ジュネーブ国連・国際機関,
シャリテ・ベルリン医科大学における研修報告
—新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) 流行による中断後の再開—

川波 亜紀子¹⁾ 戸高 恵美子^{1,2)} 頓名 幸¹⁾
佐久間 里子³⁾ 森 千里^{1,2)}

(2022年11月6日受付, 2022年12月16日受理, 2023年2月10日公表)

要 旨

2022年9月, 千葉大学予防医学センターはコロナ禍の中断を経て3年ぶりに海外研修を再開した。「新規感染症とワンヘルス」を研修のテーマとし, 本学大学院医学薬学府, 看護学研究科等の学生と教職員総勢約27名が参加した。9月20日から23日までスイス・ジュネーブを訪れ, 世界保健機関 (World Health Organization: WHO) 本部の視察にはじまり, 全部で7つの国際機関の日本人職員等から各機関の役割や課題等について話を聞いた。9月26日から29日まではドイツ・ベルリンを訪れ, 予防医学センターとシャリテ・ベルリン医科大学の共催による日独集中講義, および在ドイツ日本国大使館の支援による日独シンポジウムを開催し, 公衆衛生や感染症の専門家による講演や活発なディスカッションが行われた。かつて森鷗外がドイツから日本に取り入れた公衆衛生の歴史を振り返ると共に, 現代の脅威である新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) への各国の取り組みを学び, 新規感染症発生の背景にある, 人・動物・環境の生態系のバランスと健康を維持するワンヘルス・アプローチの重要性を認識した。参加者が本研修で学んだことを生かし, 将来広い視野をもって国際保健の問題に取り組まれることを期待する。

Key words: 公衆衛生, ジュネーブ国連・国際機関, シャリテ・ベルリン医科大学, 新規感染症, ワンヘルス

I. はじめに

千葉大学予防医学センターでは, 2013年度より

ジュネーブ国連・国際機関視察研修やシャリテ・ベルリン医科大学との共同集中講義・シンポジウム開催により, 大学院教育・研究分野での国際

¹⁾ 千葉大学予防医学センター

²⁾ 千葉大学大学院医学研究院環境生命医学

³⁾ シャリテ・ベルリン医科大学・千葉大学ベルリンオフィス

Akiko Kawanami¹⁾, Emiko Todaka^{1,2)}, Miyuki Tonna¹⁾, Satoko Sakuma³⁾ and Chisato Mori^{1,2)}. Report of study tour of international organizations in Geneva and cooperative intensive course at Charité-Universitätsmedizin Berlin – restart after suspension due to the COVID-19 pandemic –.

¹⁾ Center for Preventive Medical Sciences, Chiba University, Chiba 263-8522.

²⁾ Department of Bioenvironmental Medicine, Graduate School of Medicine, Chiba University, Chiba 260-8670.

³⁾ Chiba University German Center Berlin Office, Charité-Universitätsmedizin Berlin.

Phone: 043-290-3896. Fax: 043-287-8011. E-mail: a.kawanami@office.chiba-u.jp

Received November 6, 2022, Accepted December 16, 2022, Published February 10, 2023.

連携に尽力してきた[1-6]。これまで、本学の医学薬学府、看護学研究科、融合理工学府、園芸学研究科、国際教養学部等の学生・教職員のほか、2016年に設置された3大学による先進予防医学共同大学院で連携する金沢大学、長崎大学や他大学からの学生・教職員も参加して開催してきた。2022年度は新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の影響による中止期間を経て、3年ぶりの開催となった。

ドイツのシャリテ・ベルリン医科大学は、予防医学センターの森千里センター長の曾祖父である森鷗外が学んだ縁の場所であり、様々な学術交流を重ねてきた。2008年から森を中心としたベルリン公衆衛生大学院との研究交流に始まり、2010年に大学間交流協定を締結、2015年に千葉大学ベルリンオフィスが設置され、2016年より両大学の他部門(脳神経内科、産科・新生児科、循環器内科等)との間で研究交流を重ね、両学長が相互に訪問する関係性が築かれてきた[6]。

ところで、今年度の参加学生の募集を開始した6月は、国内でCOVID-19新規陽性者数が連日2万人を超えており、7月には第7波が到来し政府による水際対策が続いていた。併せて不安定なウクライナ情勢や急激な円安も懸念された。この現状で、果たして海外渡航を希望する学生がいるのかと心配されたが、結果的に多くの学生から申し込みが届いた。中には履修科目で予定されていた

フィールド実習や2020年度からの大学の取り組み制度である「学部・大学院生の全員留学」の機会を逃していた学生も多く、今年度が最終学年である学生にとっては最後のチャンスでもあることが実感された。

今年は森鷗外没後100年の記念の年に当たるが、2019年度を最後に中断していた日独交流を再開し、公衆衛生の歴史を振り返るとともに、新規感染症等の最新の知見を学び合うにふさわしい再出発の年になったと思われる。

II. ジュネーブ国連・国際機関訪問

国連・国際機関が多く集まるスイスのジュネーブでは、全4日間で7つの機関の職員から話を聞く機会を得た。国際機関で働くことや各々の機関の果たす役割について現場の声を聞くことが研修の共通テーマとなっており、大学院生にとって将来グローバルな視点をもって働くための契機となることや、国際保健の取り組みに関する具体的なビジョンを得ることが教育の目的であった。本学からは大学院医学研究院長・医学部長の松原久裕教授を始めとして医学薬学府、看護学研究科の学生たち、他大学からの学生1名を加えた合計12名と運営に当たる筆者ら(森、戸高、頓名、川波)が参加した。

研修1日目は世界保健機関(World Health



写真1 ジュネーブ世界保健機関(World Health Organization: WHO)本部正面玄関前での集合写真

Organization: WHO) 本部を訪問した(写真1)。2019年5月に竣工したばかりの新しい建物であるB棟の会議室を借用し、研修を行った。1階フロアの所々に、各国から贈られた国際保健に貢献した人々の像や記念の品が置かれており、学生たちは初めて訪れたWHO本部の様子に興味気味であった。今年度の研修では「新規感染症とワンヘルス」に着目した。まず初めにCOVID-19やサル痘などの感染症危機管理で活躍されている進藤奈邦子シニアアドバイザーより、「WHOで国際保健に貢献する」ことについて話していただいた。日本でも様々なメディアに取り上げられている著名な先生の話や直接伺い、学生も刺激を受けたことであろう。次に、WHO本部の12名の事務局長補(ADG)の中で唯一の日本人である山本尚子ADGに、WHOの使命とUHC(ユニバーサル・ヘルス・カバレッジ)や現代の健康問題(栄養や健康格差等)について話していただいた。UHCとは、すべての人が、経済的な困難を抱えず健康に関するサービスを受けられることを意味し、一般のCOVID-19における公平な治療やワクチン供給を目指すこともこの取り組みの一つである。午後は、AMR(薬剤耐性)の調査予防管理部門のJorge Matheu Alvarezチームリーダーより、家畜への抗生剤使用の問題を含む人獣共通感染症と薬剤耐性に関するWHOの取り組みについて話していただいた。次に日本の厚生労働省からのセカンドメントである高梨文人テクニカルオフィサーより、「WHOにおける医薬品、ワクチンの安全性監視について」というタイトルで話を伺った。最後に、栄養・食品安全性ユニットの西田千鶴ユニットヘッドに話を伺った。西田氏はWHOにおける日本人のJPO(ジュニア・プロフェッショナル・オフィサー)[7]の第一号である。西田氏の、「若いうちに現場に出てほしい」というアピールは、参加した学生の心に響いたことと思われた。

研修2日目は世界気象機関(World Meteorological Organization: WMO)の3階にある国連訓練調査研究所(United Nations Institute for Training and Research: UNITAR)の会議室を借用し、まず国連難民高等弁務官事務所(United Nations High Commissioner for Refugees: UNHCR) Senior Donor Relationsの帯刀豊氏から

話を伺った。現在ウクライナ難民へ世界の関心が高いが、世界的には難民の6割以上が国内避難民であり、難民が支援に依存するのではなく自立して生活できるよう支援することが重要であると学んだ。UNHCRと言えば、日本人初の高等弁務官であった緒方貞子氏が著名であるが、今でも「マダム・オガタ」の精神は組織内で尊ばれているとのことであった。続けて、UNITARコミュニケーション・ITサポートユニットのペロナ晶子チーフと、持続可能な繁栄局の隈元美穂子局長より話を伺った。今回の研修では、多くの女性職員から機関の役割という大きな視点だけでなく、自身のキャリアにおける私的な体験や失敗談を交えた話を伺うことができた。これらは学生にとって将来設計へのヒントとなり、成功の裏には様々な経験の積み重ねが必要であることを学ぶ貴重な機会となったであろう。

午後は国際赤十字赤新月社連盟(International Federation of Red Cross and Red Crescent: IFRC)を訪問した。レマン湖が見渡せる会議室にて日本人職員の赤松直美氏より、世界最大のネットワークを持つ人道支援団体であるIFRCの活動について話を伺った。その後、歩いて在ジュネーブ国際機関日本政府代表部へと移動した。ジュネーブはスイスの首都ではないため大使館は設置されていないが、多くの国連・国際機関が本部・支部を置き、軍縮会議など重要な国際会議も開催されるため、各国が政府代表部を開設している。予防医学センターでは2019年までの毎年、同代表部内の会議室で国際的に活動することをテーマに話を伺ってきた。今年は工藤歩・一等書記官より「国際機関で働こう!」と題して、国際機関に就職する方法やJPOの選考プロセスなどについて詳しい話を伺った(写真2)。工藤氏によると、COVID-19拡大後に同代表部を訪問したのは、日本の大学の中で千葉大学が初ということであった。後日、同代表部ウェブサイトのイベントページ9月21日付に千葉大学の訪問が紹介された[8]。

研修3日目は、国境なき医師団(Médecins Sans Frontières: MSF)ジュネーブオフィスを訪れた。このオフィスビルは訪問の前週に完成したばかりであった。MSFは、その憲章で「MSFは、



写真2 在ジュネーブ国際機関日本政府代表部の工藤歩・一等書記官から話を聞く学生

人種、宗教、政治的信条にかかわりなく、困窮している人々、自然災害や人的災害の犠牲者、武力紛争の犠牲者を支援する」と謳っており、現場で活動しているCarole Déglise医師のほか、ロジスティクスや人事担当者より話を伺った。メンバーが不足している状況であり、「いつでもスタッフを募集しているのでどんどん応募してほしい」とのことだった。そして、この日の最後に国連環境計画（United Nations Environment Programme: UNEP）を訪問し、戸田英作シニアプログラムオフィサーに、UNEPの水銀条約やマイクロプラスチック問題への取り組みについて話を伺った。

多くの職員からアドバイスいただいたのは、ただ英語力があるということではなく、プレゼンテーション力、説得力、交渉力が必要とのことであった。また、データの蓄積と解析も重要な技術であり、時代と共に必要とされる人材は変化する可能性がある。日本人は信頼性が高く評価される強みをもつという話も伺えた。

研修最終日は赤十字博物館を訪問した後、ジュネーブ在住の日本人ガイドにより、スイスがなぜ永世中立国という立場を採用したのか、ヨーロッパの戦争の歴史と共に説明していただき、赤十字創設者であるアンリ・デュナンにまつわる場所や、キリスト教における宗教改革の舞台となった旧市街の名所を訪ね歩いた。

ジュネーブは人口20万人程度の小規模な街の一

角に国連・国際機関の本部・支部が密集しており、歴史的建造物も各所にあるため、短い期間でも効率よく訪問・見学することができる。ジュネーブ滞在中の9月20日から23日までの間に1スイスフランが最高151円まで値上がりし（3月1日の時点では125円）、学生には経済的に辛い時期となってしまったが、その辛さを越えて余りある充実した研修になったと思われる。

Ⅲ. ベルリン日独集中講義、日独シンポジウム

Ⅲ-Ⅰ. シャリテ・ベルリン医科大学との共同集中講義

千葉大学予防医学センターとシャリテ・ベルリン医科大学は、2014年2月の第1回日独集中講義を皮切りに、継続して共同での開催を実施してきた。前回の2019年10月には、本学の中谷晴昭理事ら関係者に出席いただき、筆者（森）とシャリテの神経免疫学専門のFriedemann Paul教授を中心に、神経疾患のリスク因子や予防と予後に関する第5回日独集中講義を開催した。第6回目となる今年度は環境問題と新規感染症をテーマとし、2022年9月26日からの2日間、シャリテのミッテキャンパスにて開催した。シャリテの感染症・呼吸器科のNorbert Suttorp上級教授とウイルス学のSandra Junglen教授、米国ジョージワシントン大学ミルケン公衆衛生研究所のRuth

Etzel教授, WHOベルリンハブオフィスのPhilip Abdelmalik博士, および筆者ら(森, 戸高)による講義のほか, オンラインにて世界自然保護基金(World Wide Fund for Nature: WWF)ドイツのStefan Ziegler博士, 東京大学医科学研究所国際ワクチンデザインセンター長の石井健教授に講師として参加いただいた。本学からは大学院医学薬学府の学生14名, シャリテからは医学専攻の学生8名と感染症・呼吸器科の医師1名のほか, 運営に当たる筆者ら(頓名, 佐久間, 川波)の総勢34名が参加した(写真3)。

シャリテ病院は, ニューズウィーク誌の「よい病院世界ランキング」で連続してヨーロッパ第一位となった[9]。COVID-19パンデミックにおいては, 他国からの救急患者を受け入れるなど, ヨーロッパで大きな役割を担った。そのような感染症治療の最前線にある機関と共同で集中講義を開催できたことは, 学生にとって素晴らしい経験となった。

また, 今回テーマとした「ワンヘルス」という概念は, 動物由来感染症の一つであるCOVID-19が拡大したことにより改めて注目されている。人, 動物, 環境の生態系のバランスと健康を維持するワンヘルス・アプローチは, 感染症, 薬剤耐性, 環境保護, 公衆衛生と政策等が関わる分野横断的な取り組みを必要とする。今回の研修では, 各分野の専門家から喫緊の課題に関する研究や開

発について学ぶ貴重な機会となり, 学生からも多くの質問が出され, 活発なディスカッションとなった。

III- II. 日独シンポジウム

森鷗外没後100年を記念し, 2022年9月28日に千葉大学予防医学センター, シャリテ・ベルリン医科大学共催, 在ドイツ日本国大使館の支援を受けて, 第5回日独シンポジウム「新規感染症と環境予防医学における日独の役割」をベルリン日独センターにて開催した。前日までのシャリテ集中講義参加者のほか, ベルリン在住の日本関係者, 学生等約40名が参加した。本シンポジウムでは, 森鷗外が19世紀にドイツから取り入れて築いた日本の公衆衛生の歴史を振り返ると共に, 現代社会に新たな脅威をもたらしたCOVID-19に対する各国の取り組みについて, 各分野の専門家による講演, パネルディスカッションが行われた。

始めにベルリン日独センター事務総長のJulia Münch博士から歓迎の言葉, 続いて在ドイツ日本国大使館の北浦康弘公使に開会の挨拶をいただき, 森による「日本がドイツから取り入れた近代医学と公衆衛生に基づいた近代都市計画」の講演が行われた。続いて, 本学医学部附属病院感染症内科の谷口俊文准教授より「COVID-19パンデミックに対する日本の取り組み」について, シャリテのSuttorp教授より「ドイツにおける



写真3 シャリテ・ベルリン医科大学の階段教室にて開催した日独集中講義の様子

COVID-19」について、ジョージワシントン大学のEtzel教授より「21世紀の『ワンヘルス』」について講演いただいた。後半は「次のパンデミックの展望と日本およびドイツの役割」についてパネルディスカッションが行われ、ワンヘルスや各国の感染症に関する歴史および今後の使命などを議論した（写真4、5）。

日本もドイツもCOVID-19による死者数を低く抑えることができているという共通点があるが、ICU病床数に関してドイツは世界一であり、日本のICUは非常に少ない。しかし、日本の医療逼

迫の懸念に対し、シャリテのSuttorp教授からは、ICUを増やすより運ばれる患者数を減らすことが提案された。また、下水中のウイルスや細菌、薬剤が環境中に排出されることによる人への二次感染、薬剤耐性の問題についても議論された。かつて森鷗外がドイツ留学から戻り、日本の公衆衛生の改善に取り組んだ中で下水道が整備された歴史があるが、今現在も下水道は公衆衛生の重要なキーワードであることが認識された。

シンポジウム後は在ドイツ日本国大使公邸へ場所を移し、参加者対象のレセプションが行われ



写真4 日独シンポジウムで公衆衛生、感染症の専門家による活発なディスカッションが行われた。



写真5 シンポジウム会場の日独センター玄関前での集合写真

た。研究者や学生にとってなかなか訪れることのできない大使公邸に招かれたことは大変貴重な経験となった。3年前の2019年10月23日、当時の八木毅大使の協力により開催した日独シンポジウム「シャリテと日本のつながり－森鷗外を出発点として－」に続き、今年度も柳秀直大使に両大学の連携へ賛同・協力をいただき日独シンポジウムの開催を実現することができた。在ドイツ日本国大使館ウェブサイトの「大使の活動」2022年9月28日付でも紹介された[10]。

ベルリンでの研修は、最終日に現地ガイドによるドイツの歴史を学ぶツアーを実施した。1930年代のナチスによるユダヤ人迫害や、1989年のベルリンの壁崩壊に纏わる場所を訪ね、今年度の研修を締めくくった。

IV. おわりに

2013年度に開始した予防医学センター海外研修には、今年で延べ400人以上が参加した。研修の実現には関係機関との交渉や連携維持が大切であるが、コロナ禍において多くの機関で海外との交流が途切れてしまったと思われる。幸い予防医学センターでは、森鷗外没後100年の記念の年を契機に日独の交流を再開することができ、国際保健や感染症に関する世界の生の知見を学ぶことができた。研修帰国後の10月中旬、ドイツや日本でも再びCOVID-19感染者数が増え始め、第8波という言葉がメディアで聞かれ始めた。今回の研修では、参加者のほとんどがCOVID-19拡大後に海外を訪れるのは初めてであったが、一人の感染者も出さずに全員無事に帰国することができ、開催の決断は功を奏した結果となった。

ジュネーブでは、WHOやWMOのカフェテリアで昼食をとる機会を得たが、そこでは国連機関で働く現地職員の普段の生活の様子を垣間見ることができ、学生にとって国連機関がより近い存在になったと思われる。また、日本ではマスクを付けた生活であったが、ジュネーブでマスクをしていた人はほぼ皆無であり、参加者がマスクを外しお互いの顔を間近に見たのは数年ぶりだったのでないか。ベルリンでは公共交通機関でのマスク着用が義務づけられており、街中ではマスクをせ

ずに歩いていた人々が、地下鉄に乗るとマスクを着けるといふ姿を目にし、ドイツの国民性や各国のCOVID-19対策と文化の違いを肌で感じる事ができた。

世界にはまだ多くの解決すべき課題がある。COVID-19対策の各国の取り組みにおける成功と失敗から学ぶのみならず、新規感染症発生の背景にある人・動物・環境の生態系のバランスと健康維持へのアプローチを疎かにしてはならない。将来を担う世代には、広い視野をもって国際保健を学ぶことが求められるであろう。

貢献者

川波は本稿の構想、情報収集、執筆を行った。戸高は本稿の執筆、推敲、情報提供を行った。頓名、佐久間は情報提供、原稿の校閲を行った。森は最終原稿の校閲を行った。

財源支援

- ・国立研究開発法人科学技術振興機構（JST, OPERA, JPMJOP1831）
- ・令和4年度千葉大学国際交流公募事業 海外との組織的教育研究交流支援プログラム

利益相反

著者らは、この論文の内容について財源的および非財源的な利益相反を有しないことを表明する。

倫理的承認

該当なし。

データの可用性

該当なし。

謝辞

本研修の開催にあたり、ご協力いただいたIFRC, MSF, UNHCR, UNITAR, UNEP,

WHO, WMO, 在ジュネーブ国際機関日本政府代表部, シャリテ・ベルリン医科大学の教職員・関係者の皆様に心より感謝申し上げます。また, 日独シンポジウムをご支援くださった在ドイツ日本国大使館の柳秀直・在ドイツ特命全権大使・職員の皆様に深謝いたします。最後に, 講演を快く引き受けてくださった東京大学の石井健教授, 千葉大学医学部附属病院の谷口俊文准教授, ご参加いただいた学生の皆様, 学生教育や旅費補助等にご協力いただいた全ての関係者に厚くお礼申し上げます。

Abstract

In September 2022, Center for Preventive Medical Sciences, Chiba University conducted overseas study tour after two years of suspension due to the COVID-19 pandemic. The theme of this study tour was “New infectious diseases and One Health” and a total of 27 members including students from Graduate School of Medical and Pharmaceutical Sciences, and Graduate School of Nursing participated. We visited seven international organizations including World Health Organization in Geneva, Switzerland from September 20 to 23, and we received lectures from Japanese officers about their roles and challenges. Between 26 and 29 September, we visited Berlin, Germany and had a cooperative intensive course and symposium with Charité-Universitätsmedizin Berlin. The Japan-German symposium was supported by the Embassy of Japan in Germany. The experts from public health and infectious diseases gave lectures, and discussions among the lecturers and the students were very active. Throughout the intensive course and the symposium, the students learnt the current public health issues, looking back on the history of modern Western medicine which Ogai Mori imported from Germany to Japan in late 19th century, then learned the current world’s measures to COVID-19, and recognized the importance of “One Health” approach, the idea that the health of people,

animal health and the health of the environment are inextricably connected. The participated students are expected that they would have global and broader perspectives on the current health issues, and they would contribute for the health of future generations.

文 献

- 1) 森 千里, 柏原 誠, 戸高恵美子, 鈴木 都, 中岡宏子, 羽田 明. (2014) 日独シンポジウム「日本とドイツにおける予防医学と公衆衛生」を終えて. 千葉医学90, 131-5.
- 2) 森 千里, 柏原 誠, 戸高恵美子, 鈴木 都, 中岡宏子. (2015) ドイツ・ベルリンにおける千葉大学グローバル化拠点形成に向けて. 千葉医学91, 119-23.
- 3) 庄司竜麻, 中岡宏子, 戸高恵美子, 柏原 誠, 志賀里美, 川波亜希子, 古賀千絵, 森 千里. (2016) 「グローバルヘルス」への千葉大学の取り組み: 日独共同集中講義 (ベルリン)・国際機関研修 (ジュネーブ) に参加して. 千葉医学92, 51-5.
- 4) 塚田かおり, 中岡宏子, 戸高恵美子, 志賀里美, 森 千里. (2017) 千葉大学予防医学センターによる国際水準の教育展開: ジュネーブ国際機関視察研修に参加して. 千葉医学93, 53-7.
- 5) 古賀千絵, 戸高恵美子, 中岡宏子, 志賀里美, 森千里. (2018) 研修報告 千葉大学予防医学センターによる第7回ジュネーブ国連・国際機関視察研修に参加して. 千葉医学94, 79-84.
- 6) 柏原 誠, 中岡宏子, 戸高恵美子, 川波亜紀子, 志賀里美, 森 千里. (2019) 千葉大学のドイツ・ベルリン拠点形成: 2018年までの取り組みと今後の計画. 千葉医学95, 79-84.
- 7) 外務省国際機関人事センター JPO派遣制度 <https://www.mofa-irc.go.jp/jpo/seido.html>
- 8) 在ジュネーブ国際機関日本政府代表部 イベント 2022年9月21日 https://www.geneve-mission.emb-japan.go.jp/itpr_ja/event_j.html
- 9) シャリテ・ベルリン医科大学 クリニカルセンター https://www.charite.de/en/clinical_center/themes_hospital/newsweek_ranking_charite_is_the_best_hospital_in_europe/
- 10) 在ドイツ日本国大使館 大使の活動 2022年9月28日 https://www.de.emb-japan.go.jp/itpr_ja/uberuns_termine.html